

あらためて、避難についておもう（2）

最近、ある方から矢守克也（2024）「避難学」（東京大学出版会）という図書を紹介されて読みました。題名からして現代の社会現象から研究するという、いわば考現学という分野のものかなと思いながらも、サブタイトルが「逃げるための人間科学」というのにも気になりながら読み進めました。



災害発生時の避難はルールがあつてのスポーツではありませんので、その状況に応じて最適解を求めて行動するということが必要です。と同時に避難は災害発生時の最強のツールでもありますが、災害のたびにこの避難についての情報伝達や避難の方法などの課題が話題になります。本書は3部から構成されていて、第1部のコンセプト編では、避難学のパラダイムチェンジということで8つの「やめよう」提言が事例を交えて解説されています。そして災害情報についての検証と考察、逃げ方の最近の傾向というようなことが興味深く解説されていて、関心を誘導させられる多様な事例が紹介されています。

第2部は避難訓練について、訓練の意義、さまざまな条件を取り入れた訓練、津波避難訓練支援アプリ「逃げトレ」について現状と今後の展開について説明されています。特に、想定外への対応については新しい知見というか思想が盛り込まれているように思われます。「この逃げトレ」は想定外に対する対応として観察(予測)の精度を与えようとする方向へ導かれるものになっていて実績もあります。加えて旧来の発想を根本から見直しというか廃棄して、避難というものを「能動対受動」から「中道性」という新たな視点を提起されています。

第3部はマネジメント(施策)では、防災への取り組みと役割などについてこれまでの経緯を踏まえて新しい展開の必要性が論じられています。これまでのような行政的な見方から住民主体へと視点を移しながら、継続可能な構想をする必要性が具体的な例で示されていて、その結果「自助・公助・公助」を破産するということにつながっていきます。「逃がし方」から「逃げ方」への転換ということの重要性が強調されていて、読み進むと「そうそう、なるほど、なんだよね・・・」という納得感がわき出ます。他にも、各地における実践的なことが紹介され、とくに高知県黒潮町での取り組みについては、他地域でも採用できるアイディアとか考え方が紹介されています。地域防災力というか災害への関心度ということのもとのもとは思想の結実であるということに改めて感じさせられます。

また、あり当たりのものではなく、住民を主体にした手作りこそが地区防災計画として共有できるものになるということです。他に、南海トラフ地震の臨時情報やコロナ禍から学習できしたことなどにも考察が進んで、結局はどう逃げるのかについては、どう逃がすかを期待していくには手遅れであって、どう上手に逃げ切ることができるのか詰めておく必要があります。

避難を考えるということは、日常の様々な問題点や課題を見据えて取り組んでいく必要が

あるということです。かといって、専門家や行政が特権的に支配するのではなく、逆に日常生活を現にそこで暮らしている人々の考え方、スタイルを知って相互に交流したり融合したり協働するという行為こそが大きな原動力になるということが、これまでの学習成果からも明確になってきています。著者がいうには、避難に関する研究や実践は、近年、「主体性」「当事者意識」「我がこと感」「自ら」という言葉をキャッチフレーズを掲げているということで、これまでの「逃がす」という発想でなく、逃げるためにはどのような環境整備が必要なのかということに気づくことこそが、これまでの経験や事例から導き出されたものであると感じさせられます。

本書は、防災関連の専門書ということではありますが、新しい知見が身近な事例で解説されているということで読みやすく、索引も豊富ですので、これを手掛かりに拾い読みしても面白いと思います。また、本書には補論として 2 編掲載されていて、タイトルが「アフター・コロナ／ビフォーアフター/X」というのと「ボーダーレス時代の防災学—コロナ禍と気候変動災害」が添付されていて、新しい避難学の芽生えを感じられ防災の非自然科学的分野での研究の面白さにも気づかされるかもしれません。

(蛇足ながら・・・)

本書を、仙台市民図書館の震災文庫の開架コーナーで探しましたが見つからず、図書検索機でみたところ、分類記号 369(社会科学・社会福祉)の書棚にあるのを発見した。読者側から言えば、ぜひとも震災文庫の方にも備えていただいて、この図書を多くの人に关心を持っていただきたいなと思いました。

防災という多岐に亘る学際的な領域がゆえに関連図書の住処も広くなっているでしょう。図書館内に震災文庫のようなコーナーを設置しているのはありがたいのですが、防災カフェとして拡大させ図書相談もできるボランティアのガイドさんがいてもよいのかもしれません・・・